「一秋の実り」続編

# 「三秋」で登る猪犬の頂点②

田宮 治

## 若犬群、頑張れ！俺について来い

心に残る大切な一戦、初猟は千葉である。もうかれこれ四年くらいになるが、千葉では名の通っている親方石井氏が「仔犬が欲しいけど、その前に父母犬の芸が見たい」とのことで出向き、勢子長の斉藤氏が猪を止め刺して以来のお付き合いで、今では気心の知れたグループとなっている。猪を追い、猟観を語り合い、楽しみを確かめ合い、とても良い関係にある。

石井氏は永年ビーグル会の会長を務められ、猟犬観は鋭いものがある。私の若犬に対してもなかなか手厳しい意見をぶつけてくる。本気で、それならば勝負するか！などと存念を打ち付け合っている。

三役格の伊藤氏は全猟の猪犬大会で優勝を飾ったりしていて、仔犬育てや猪猟観は大変なものである。最年長の金杉氏もプロットから和犬まで何頭も訓練しており、愛犬を引き連れての勢子ぶりは頑張るを超えた元気そのもので、年をまったく感じさせない。「鹿を撃たせたら俺が一番」と、飲むと笑顔で自慢する。聞き入る仲間もみな立派な人格者で、猟技術も考え方もなかなかのものであり、獲れて当たり前のようになってきている。

そんなグループに今猟期（十九年）は一秋＝一ノ矢の若犬を連れての参加となったのである。不安がないと言えば嘘になる。しかし、私なりに春先から特別な思いで訓練に励んできた。暑すぎた昨年ではあったが、先犬一頭に三頭の仔犬を付け、朝早くの入山で実戦よろしく気ままに流し走らせる。猪に当てないのを除けば真に実戦で、犬たちの動きに細心の注意を払い、たえず声をかけながら時々に手を打つ。虫に刺され、終わってみれば服は汗でぐっしょり、絞るとしたたり落ちる。谷川で体を拭いて反省する。訓練というよりは山に慣らす体力作りが中心だった。

九月に入り、若手のゲン号を先犬に七カ月の五頭を犬群として構成。その協調性と山抜けを見ることにした。当然のこと、猪には当たらなくてもよい。ここで大切なのは犬群のまとまりであり、狩り込んでもすぐ戻り、見える範囲にいつもいることを叩き込むのである。

当初は若犬がゲン号にしたがわず、数に物言わせる仔犬のヤンチャな行動に手を焼き、なかなか思うようにまとまらない。そこで超ベテランのラン号を組み入れたのである。ラン号は私にとって宝犬で、ミス号、クロ号、ナオ号、チヒロ号などの名牝犬群の中にあって、富士美号、富士子号、五郎号、富士号、そして何よりも先犬ゲン号の母犬である。

ラン号の一芸は素晴らしいもので、逃がれようとする猪に追いすがり、執拗に足に咬みを入れるものである。ギャッギャッと、迫力ある鳴きで強烈に後ろ足に咬み込む速さは天下一品で、決して猪をノテに乗せない。ラン号は黒の小さな犬で咬みは決して強くはないが、牝ながら絶対にひるまない闘争心と足と口かけが速い。猟友もラン号の一芸はよく知るところで、行く先々でラン号も来たかと喜ばれたものである。クマ号とのコンビの良さは紹介させていただいたとおりであり、二度とできない最高の名コンビであったと思っている。

## 自信と不安の門出 一秋の初陣

振り返れば、自信と不安の中で迎えた一秋目の挑戦となった初猟（十九年）は、千葉の石井グループであった。早朝から見切り、私が猟場に着いた時は作戦会議も終わっていた。会長の一言で今日のトップを切るのは最年長の金杉氏である。いつもながらの元気な勢子声が朝もやを突いて響き渡る。愛犬の鈴の音と小気味良い足音が、今を盛りの紅葉の中をだんだん近づいて来る。「親子連れの猪が入っている」とのことで、気持ちも高まり、さあ来いと目をこらす。

千葉の山は暖く、この時期でも茂みが多く見通しはきかない。そのためライフルは禁止されており、握りしめているのは散弾銃の三連ベレッタである。

無風にて快晴。小鳥の囀りと落ち葉の音以外は静かだ。本当に久しぶりのタッである。

「出て来てくれ」

あそこで狙って、あそこで撃つ。勢子と犬たちの声でわき上がるその瞬間を心待ちにしていたが、とうとう猪は出ず、私の上を金杉氏と愛犬たちは通り過ぎて行った。第一ラウンドはあっけなく終わった。

第二ラウンドは車で十五分くらい移動した同じ山の続きである。千葉特有の山頂に小道の走る大きな出峰を二分し、真ん中にタッを張り、下方から伊藤氏の紀州犬群で攻め、上方から私の犬群の出番となった。

山を全く知らない私には勢子長の斉藤氏がいつもどおり付いて、「タッ完了！」の合図とともに、大杉林の小峰伝いに犬群を放す。小峰を中ほどまで下り、横に狩り込みタッにはめる作戦なのであるが、昨日の夕方から箱詰めで待ちこがれての出番のためか、全犬張り切っているようで、あっという間に姿が見えなくなった。

「何で、こうなるの……」

どぎまぎしてその原因を探ると、すぐ下に鹿がいたようだ。私の頭の中には猪しかないので、必死で大声を上げ呼び戻しをかけるが、一頭も帰って来ない。斉藤氏と顔を見合わせ、「鹿に付いてしまったね」と立ち止まって様子を見ていると、犬がケンカしているとの無線が入る。小峰ではあるが二つくらい先のようで、銃声も聞こえなかったので、てっきり若犬同士のケンカだと思い、「思いっきり叱ってください」と告げる。

こんなことのないよう十分トレーニングを積んで来たのに……。満座の前で恥をかかされた気分で、いつもの強気もふっとんでいた。仕方なく犬群の後を追うことにした。十分くらい進んだところでゲン号を先頭にヨシ号と富士美号が帰って来た。何事もなかったように近寄って来た三頭の頭をなでながら、「よしよし、どうしたの、お前たち……」

しばらく待つがマロ号とブル号は戻って来ない。無線で聞くと、叱ったらその二頭は山裾に広がる田んぼ道を反対の方向に逃げて行ったとのことである。おかしい。マロ号とブル号は今までそんな行動をとったことは一度もなく、一秋の一ノ矢の中では、猪の顔面に見事に咬み込むまでに成長している期待の若犬なのだ。戦力を二枚欠いては残念だ。

今日はそんなことも含めての実戦で、何といってもタッを置いて頑張っているところである。「よし行くぞ！　なに、三頭で十分だ。さあ行け。よしよし」と、その先を予定どおり狩り進んだのである。

私の場合、勢子声は一切出さない単独猟。俺流の猟法で静かに犬群に声をかけながらの行進である。マロ号とブル号はいつもどおり必ず後を追って来るものと信じていたが、何があったのか来ない。目の前の三頭に注意しながら出峰を一つ越えた小沢に猪跡を発見。どうも小猪が二、三頭付いているようだ。

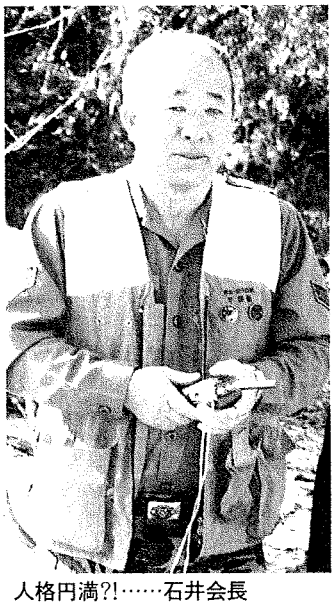
「よしよし、さあ、猪だぞ！」と犬たちを元気づけながら青木が立ち込んでいる沢を登り、千葉特有の竹とボサ藪にさしかかった。

ゲンの様子がおかしい。すぐヤマドリの見事なものが飛び出す。さすがヤマドリの本場、「良いものだね」と斉藤氏と笑顔で話す。

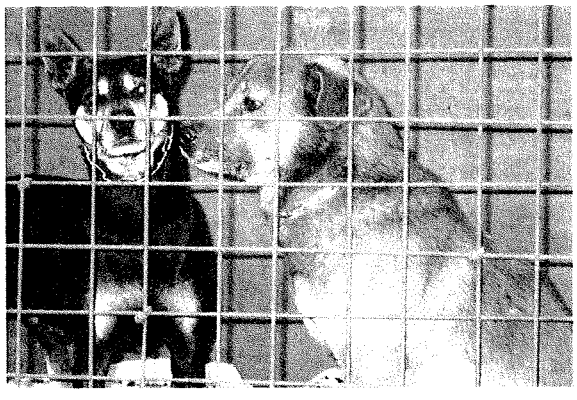
それを合図のように三頭の姿が見えなくなった。ボサ藪をかき分けて犬たちを追うように小峰に出た。その時である。ゲン号の迫力

関東猪犬猟山彦会相談役の兄の満。狩りの師でもある。まだまだ元気な80歳

名台牝サクラ号（左）。ゲン号との間に生まれた「三ノ矢」レオ号やカク号、サスケ号が猪にどんどん行くようになり、「三秋」が見えてきて楽しみにしている。牝のメグ号はあと少しだ。右は先犬ゲン号。おびき寄せ芸もこなせる



人格円満?!……石井会長



二度とできない名コンビのラン号とクマ号。おとなしく良い仔である

一ノ矢のヨシ号とブル号。まだ7カ月だというのにこの気迫！　2頭とも顔面に一直線に行く。決して逃げないど根性の持ち主である

ある止め鳴きである。「よし出たぞ！」

斉藤氏が全タッに檄を飛ばす。あっという間に斉藤氏は小峰伝いにぶっとんで行った。止めの現場は小峰の盛り上がったすぐ下のようで、わずか五〇メートル先ではあるが、見通しは悪い。それでも全犬付いているようで、良い感じで吠え込んでいる。

「よし、頑張れ。もう少しだぞ」

そう思ってその場で待つが銃は鳴らない。おかしいなと思ってい

「二秋」=「二ノ矢」の期待の星。左からキヨ号、ハヤト号、ヒデ号。どの仔もそっくりで、猟芸もかたまってきた

石井氏グループの「一番良い顔?!」。前列一番手前が全猟猪犬大会優勝犬所有者の伊藤氏。前列左端が金杉氏。右奥のトラックの荷台にいるのが勢子長の斉藤氏。一番左が筆者

ると、十五分くらいで追い鳴きに変わった。しまった、止め切れなかったか。急いで小峰を戻り両側が見下ろせる場所で銃を構え立っていた。確実に咬み込む前に急ぎ音を立てて近づいたら、二頭くらいの犬ならば、たとえ咬み込んでいてもそのまま根こそぎ走るものである。あと二枚いてくれたら……と頭をよぎる。

あの吠え込みだと二、三頭はいたはずだ。三頭の犬で一頭の猪ならばきちっと止め切っているはずだが、三頭くらいの群猪になると、まだ谷落ちするまでの実力はない。そうすると必ずこの下を登るように横切るはずである。

その時である。ヨシ号の鳴き声の先を五〇〜六〇キロくらいの黒い猪がぶっとんでいる。四〇メートルくらい下の青木の中で、とても撃てない。さらに反対側の竹のボサ藪の中をゲン号と富士美号がバリバリと音を立て突き進んでいるが、姿は見えない。追いつけない悔しさで、キャンキャン鳴きながら通り過ぎて行く。私は咄嗟にヨシ号の猪を狙って小峰を上に向かって走っていた。この峰を越えさせてなるものか！　まるで猪とジジの競争である。

上には車道がある。そこまでを断てば、ヨシ号は必ず次のマチ、杉本氏のところに追い込むはずである。必死で大杉林を這い上がり、道路の見えるところまでたどり着いた。よし越えていない。これでよし。その時、待望のバァーンである。しかも一発。決まり?!と思いたいのだが、どうも音が悪い。

ともかく、銃声を頼りに一目散に向かっていると斉藤氏が来た。手短にお互いの報告である。斉藤氏は止め現場にあと一息だったらしいが、飛び出されたとのことである。やっぱり三頭で親子猪三頭を止めていたが、上から斉藤氏が走り寄ったので、その音で飛び出したようである。あと少し、ほんの一瞬だったのにとさかんに悔しがっている。私は大汗をふきながら案の定、若犬たちは日頃の成果を果たしてくれたことでひとまず安堵していた。

「仕留めてくれましたかね。金

杉さん、とれますか、どうぞ」と連絡しても返事がない。二人でタツのすぐ下の谷に出た。金杉氏は一生懸命撃った猪を探していた。そこはまるで切り立った崖で、とても危険である。「確かに当たったはずだが……」と上のほうで怒鳴っている。「この下あたりにひっかかっていないかのお」

そこは上からも下からもとても寄り付けない崖で、斉藤氏も上を見上げながら大声で「とても登れないよ」と告げるが、悔しそうに「当たったはずだが……」と繰り返す。二人で二度、三度と落ちたと思われる猪を探し回るが、どうにも登れるところではない。「駄目だ、こりゃ」と斉藤氏ははき捨てるようにつぶやく。

そのことを金杉氏に告げ、ひとまず終わりにして上の道に出ることにした。反対側の崖に植え付けられた杉林の急坂を登っていると、三頭が残念そうに戻って来た。腰を下ろしひざまずき、一頭、一頭、頭をなで体を抱き、「よしよし、よくやった。上出来、上出来」と褒めてやった。若犬たちは私の膝に顔をすり寄せ目を細めている。愛犬たちも「ジジ、獲れなかったな」と言いたいようだ。

大汗でぐしょぐしょのタオルで若犬たちの顔を拭きながら、今日の一戦はどうしても猪に勝たねばならないのに、「ジジが悪い。ごめんね」と話しかけているところに親方石井氏からの無線である。「赤い犬が大怪我で、医者に連れて行かねばならないので、すぐ戻るように」とのことである。斉藤氏が現在地と上に出る道を告げている。疲れた足も急ピッチになり、ようやく車道に出た。どうしたことだろうかと不安だけが広がる。

放犬後、犬同士のケンカだと言うので「思いっきり叱ってくれ」とお願いした。

「おかしい、決してケンカなどしないはずなのに……何でだろう」

叱られて反対の小道に逃げたというブル号とマロ号。たとえどんな理由があろうと、決してやってはならない置き去りにしたのである。しかも、成長期の若犬で一番大切なこの時期にである。

今日はグループ猟でブル号たちにかまっていられない状況であった。大怪我をしたのはブル号に違いない。二頭は叱られながらも忠実に私の教えを守り、逃げた先で猪と戦っていたに違いない。あのブル号が大怪我となると大猪だ。並の猪ならば二頭で十分戦える。しかも、二時間も戦い続けたことになる。早足に歩きながら、その時々の訓練の姿が目に浮かんでくる。マロ号はそれなりの実績もある。それと鳴き止めタイプで、咬みも強いが用心深い。間違っても切られるタイプの若犬ではない。

一方、ブル号は見事な咬みで一直線に頭に行く。決して逃げないし、父親の初代ブル号譲りの強力な咬みが身上で、二代目ブル号と名付け、可愛がって育ててきた一番期待の仔で、十カ月になる。訓練中も負け知らずの荒芸で、心配していたのである。

そんなことを思い巡らせていると、石井氏のハイラックスのダブルキャブがゆっくりと近づいて来た。焦る気持ちで駆け寄って荷台を見ると、やっぱりブル号が不安そうにいた。

「すぐ医者に急行する」と言う石井氏に、「この荷台を借りますよ」と言って荷台に飛び乗った。「よしよしブル、ジジだよ。もう大丈夫」と話しかけると、それでも元気に尾を振り寄り添って来た。「よく頑張ったな。よしよし」。いつの間にか猟友も駆けつけ、皆心配そうである。

「悪いけど、このタオルを水で濡らしてください」と猟友に頼んだ。そして血だらけのブル号の体を注意しながらすべて拭きとり点検した。確かに大怪我だが、幸いなことに、傷はすべて向かい傷だが、さすがブル号、素早い動きでうまくかわしていたようで致命傷はない。「よしよし、大丈夫だぞ！ブル！」。私は心の中でそう思い安堵した。

石井さんが「今、一流の外科医が駆けつけて来るから大丈夫だよ」とわざと大声で笑い飛ばした。猟友たちが心配して見守る中で手術は始まった。

「石井さん、悪いけど首輪の所

を押さえてください。絶対咬まないし、大丈夫だから……」

こんな時のために一通り必要なものはいつも持ち運んでいる。三十分くらいかけて傷口の毛を切り、きれいに消毒。三十針以上をきちっと縫ってやり、「ハイこれでOKですよ」。石井氏も取り巻いた猟友たちも、びっくりしている様子だ。

ちなみに、単独で咬み止め犬猟を実行するからには、ハサミ、縫い針、糸、消毒液、化膿止め飲み薬（人間用のクロマイ）と塗り薬クロマイ軟こう、それと手術用の消毒液、ガーゼ、包帯、ガムテープなどと、私の場合は「メガネ」を必ずリュックに入れている。犬も慣れてくればあまり暴れず縫わしてくれるし、受傷したらすぐクロマイを飲ませ、塗ってやるだけでも、早く、確実に治るのである。

慣れてくると、自分でたいていのことはできるようになるので、安心して猟がやれるし、咬み止め犬猟人の大切な心得である。

横道にそれたが、そんな訳で猟友たちも安心し笑顔を取り戻して の昼食となった。石井氏の話によると、ブルとマロ号は逃げた先の山で大猪とやり合っていたようで、誰も駆けつけてくれないので道に出たところを連れ帰ったとのことである。

不思議に思っていた若犬のケンカの原因も、鹿を追ってあっという間にタツにはめこみ撃ち獲ったためのケンカで、獲物の権利主張の若犬の行動である。本来ならば、褒めて当然だったのに、若犬としたら心外の仕打ちだったはずで、絶対に叱ってはならないことなのである。

ただのケンカと、獲物の権利主張のケンカは治める方法が全然異なる。特に日本犬の場合は、注意しないと一度で取り返しのつかないことになりかねないのである。

事実、このことがあってから、ブル号は猪を止め切れずに追った場合でも、タツが撃った猪には見向きもしないで帰って来るし、知らない人のタツには決して近寄らない。タツを前にすると必ず逃げるように帰って来る。ただ、このことは今もってグループには伝えてはいない。獲物を前にしてのケンカは当然のこと、きちっと修正している。

このように問題も残る一秋目の初猟だったが、私が言いおきたいことは若犬の真実であり、この時期の実力を初猟での実戦を通して知っておいていただきたいことである。その若犬芸が一秋の終わりに、二秋、そして三秋たったらどのような芸域に到達しているか、その辺のことをお伝えしたいと考え記述しているところである。

そのために若犬の成長に合わせ訓練の手順を踏み、適切な手段を編みだし、登り詰めていく様子を細かく具体的にありのままを述べさせていただくことで、どの項目をお読みいただいても猪犬道と猪猟方法についてすんなりと入りこめて、分かっていただけるようにと、くどいほど大切だと思うことは繰り返している。何か猪猟をする上で参考になり、よいきっかけができて、そして面白ければ最高だと思うのだけれど、そう、うまい具合に問屋も卸すまい。

（つづく）


会員のひろば

# 狩猟点描投稿歓迎

- 実猟体験記（成功談・失敗談），愛犬物語，猟犬の飼育・管理・訓練あれこれ，トライアル体験記，私のトライアル必勝法，愛銃物語，私の射撃上達法など，会員の皆様が日頃お考えになっておられることをどしどしご投稿下さい。
- 原稿枚数　400字詰10枚程度
- 応募先　全猟編集部
- 掲載分には規定の原稿料をお支払いいたします。

※なお，誌面の都合上掲載が遅延したり，不掲載となる場合がありますのでご了承下さい。